津市立南が丘小学校だより

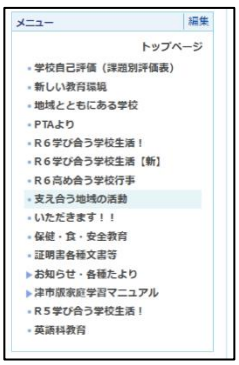
かがやく未来

2024. 12. 10　NO.38

すぐそばに本があるっていいですね

　ある有名な作家が「これまで何冊くらいの本を読みましたか？」と尋ねられ、「８００冊か９００冊くらいだ」と答えたそうです。質問をした人はその数が予想より少なかったため、大変驚いたそうです。私たちは読書というと月に何冊、年に何冊…と冊数にこだわることがあります。決してそのことが悪いという意味ではありませんが、このエピソードを管　啓次郎さんという人は「読むことの濃度はそれぞれであり、“冊“という単位には意味がない」と言い切っています。管さんは詩の読書について「１行が心をとらえることがある。１行がきみを変えることもある」と著書の中で述べています。今、本を読むとき、書店や図書館に足を運ぶだけでなく、電子書籍など無数の本に出合うことができます。私は電子書籍が苦手で専ら書店にいき、時間をかけてゆっくりと楽しみながら本を選びます。本の読み方は人それぞれで、「何を」「どう読むか」も人によって違うことと思います。「１冊の本を１０回読む」こともよいでしょう。読む時の自分の環境・心境・年齢によっても読み方が変わってくるでしょう。また、繰り返し読むことで自身の血肉となっていくでしょう。また「１０冊の本を読む」こともよいでしょう。それは本によっても違うかもしれません。「座右の銘」という言葉がありますが、「座右の書」となる本をお持ちの方がいらっしゃるかもしれませんね。読書は言語力を身につける近道であると同時に、創造力を高めるためにも大切であると思います。「本を読みなさい」と言われて読めるものではありませんので学校では図書館司書やボランティアの方がたくさんの知恵を出しながら環境整備をしていただいています。学級によっては引き出しの中に常に本を入れておき、ちょっとした時間ができた時に読むように指導をしているところもあります。私も担任の時にはそうしてきました。１１月１日から８日までは読書週間として全学級で朝の読書に取り組みました。強化週間としての時期は終わりましたが、引き続き少しの時間でも本を読む習慣が身についてほしいと思います。日が暮れるのが日ごとに早くなり、夜長に読書をすることが心地よい季節となりました。子どもたちのすぐそばに本がある…そんな風になっていってほしいなあと思います。

英語に何気なく親しんでもらうために…



　南が丘小では以前から文部科学省の教育課程特例校として１年生から全学年において英語科の授業を行っています。子どもたちが小さい頃から英語に親しんでもらいたい…と英語科の授業を担当している職員は様々なアイデアを出してくれます。今回、児童玄関に赤いボタンを設置しました。詳しくはホームページをご覧ください。